

【報告】**グレインジャー音楽祭 2011——国際シンポジウムとコンサートを開催して**

宮澤 淳一

2011年11月27日から12月1日まで、東京、仙台、京都にて、「没後50年記念グレインジャー音楽祭2011」を開催した。フライヤーの文句を借りれば、「異色の音楽的ヒーロー、パーシー・グレインジャー [1882～1961] の生涯と仕事を国際シンポジウム、各種コンサート、映画上映などで回顧する特別イベント」である。2011年2月17～20日、ロンドンで催された記念企画 *Celebrating Grainger* に刺激され、日本でもやろう、と、演奏家・研究者の有志が集まり、「グレインジャー没後50年記念イベント実行委員会」を結成し、企画を立てた。グレインジャーのオーストラリア人としてのアイデンティティを探求することをテーマとしたこともあり、実施にあたっては、豪日交流基金の助成をベースとさせていただいたが、日本音楽学会の会員の方々にも広く参加を求めて機会を共有したいという意図から、「日本音楽学会支部横断企画」としてお認めいただき、加えて会員への告知の協力と諸経費の助成を受けた。この場を借りて、関係者各位に感謝申し上げる次第である。

メイン・イベントとなったのが11月27日(日)、青山学院大学(青学講堂ほか)での東京公演である(青山学院大学総合文化政策学部主催、実行委員会共催)。午前中に映画上映、午後にはピアノ・ソロ、基調講演、国際シンポジウム、ウインド・セッション、ピアノ・チームワークとフィナーレ——以上を1日でまとめてしまう(しかも入場無料)という欲張りな企画となった。

午前10時30分より、映画『高貴なる野人(*The Noble Savage: Percy Grainger*)』(バリー・ギャヴィン監督、英セントラル、1986年、80分)を上映。英国のグレインジャー協会より提供を受け、私が大学で担当する実習クラスの学生たち(通称「映像翻訳ラボ」)とともに字幕を作成した。これは、グレインジャーの生涯と仕事をバランスよくまとめたドキュメンタリー映画である。音楽家、関係者、研究者のインタビューと、グレインジャーの奇想天外な発言(本人の音声を含む)が、矛盾に満ちた異才の生涯と仕事を浮き彫りにする。言葉で説明しつくすのではなく、主要作品の演奏が、それぞれ比較的長く収められているのも魅力で、グレインジャーの多面的な世界への格好の導入となった。

昼休み、青学講堂ロビーでの「蓄音機で聴くグレインジャーのピアノ+テープ録音で聴くフリーミュージック」を経て、午後は、グレインジャー演奏の第一人者ペネロピ・スウェイツの独奏(および解説)で始まった。《シェパーズ・ヘイ》、《ストランド街のヘンデル》、《コロニアル・ソング》等、代表曲を中心に演奏され、当代のすぐれた「ピアニスト=コンポーザー」であったグレインジャーとしての大切な一面が十分

に伝わってきた。

続いて、同じくスウェイツによる基調講演「パーシー・グレインジャーという人 (Percy Grainger, the Man)」が行なわれた。講演は、グレインジャーをめぐる通念的な言説4点(彼の個性は奇抜なだけで論理的な説得力に欠ける; 彼が人種差別主義者だった; 母親のローズが息子を支配する怪物的存在だった; 彼の性的傾向がすべて母親の責任である)に対する異議申し立てであり、彼の仕事の全容を肯定的に概説するもので、グレインジャー研究の今後の展望を指し示していた。

これを承けて催されたのが国際シンポジウム「グレインジャーのオーストラリアン・スピリットとグローバル・マインド」である(司会は筆者、同時通訳付き)。まず、チャロン・L・ラグズデイル(米国アーカンソー大学教授)の「民謡収集の芸術と科学へのグレインジャーの貢献(Percy Grainger's Contributions to the Art and Science of Collecting Folk Song)」は、伝統的な紋切り型の民謡収集と、20世紀初頭においていち早く蝋管録音機を導入し、緻密な記譜法を駆使したグレインジャーの画期的な民謡収集の実際を対比して説明する発表だった。グレインジャーの最大の業績のひとつである民謡収集の意義が、総論として、予備知識のない聴衆にも適切に示された。次の柿沼敏江(実行委員、京都市立芸術大学教授、西日本支部)の発表「パーシー・グレインジャーとアフリカ系アメリカ人、アメリカ・インディアンの音楽——ナタリー・カーティス・バーリンとの関係を中心に」は各論として、諸文化の音楽に向かったグレインジャーのグローバルな関心の拡がりを実証的に示す報告として秀逸であった。アストリッド・クラウトシュナイダー(メルボルン大学グレインジャー博物館学芸員)による最後の発表「“私なりのオーストラリア的視点で見る”——パーシー・グレインジャーとメルボルン大学グレインジャー博物館(Seeing things in my Australian way: Percy Grainger and the Grainger Museum at the University of Melbourne)」は、題名どおり、グレインジャーがみずから祖国に創設した博物館の設立の経緯をたどるもので、このシンポジウムないしはイベント全体の「オーストラリア人としてのアイデンティティ」という問題を十分に意識した内容であった。以上の報告から、総じてグレインジャーの母国への帰属意識とグローバルな発想の両面が彼の芸術表現に反映されていたことが確認された。(なお、基調講演と3本の報告原稿は、『青山総合文化政策学』通巻第4号〔2012年3月〕に再録された。日本音楽学会会員で入手を求める方は筆者までお問い合わせください。)

その後「ウインド・セッション」として、指揮者の大澤健一が率いるくにたち Winds(正式名は国立音楽大学ウインドアンサンブル研究会)と特別編成の合唱団(くにたち Winds コーラス)が出演。中心に置かれたのは組曲《リンカーンシャーの花束》の全曲解説・演奏であった。英国リンカーンシャー地方で収集した民謡旋律を変容させたこの大作はグレインジャーの最高傑作のひとつであるばかりか、吹奏楽の分野でも金字塔であり、また、プレイヤーの技量の試される難曲であることが、大澤と筆者とのトークと原曲の録音の例示を通して立体的に説明された。合唱を伴った《アイルランド、デリー州の調べ》の演奏も、グレインジャーの民謡編曲の豊かな世界を十分に

伝えるものであった。

夕刻に始まった「ピアノ・チームワーク」は、伊賀あゆみ&山口雅敏のデュオ（2台ピアノ）によるトークも交えたセッションだった。終始くつろいだ雰囲気であったが、《子供のマーチ》や《緑の森で楽しく踊ろう》といった単純な旋律のミニマルな音楽が、2名の奏者のインターアクションによって、増殖的・重層的な拡がりを生み出していくさまは圧倒的で、《ワルソー・コンチェルト》や《ポーギーとベス幻想曲》といった技巧派の編曲作品は華々しかった。そしてアンコールとして、P・スウェイツを交えて演奏された1台6手の《ザンジバルの舟歌》はそれまでの華麗な演奏とは対照的な静謐な世界によって聴き手を魅了したと思われる。かくして「フィナーレ」に選ばれたのはピアノ2台と吹奏楽による快活な《ガムサッカーズ・マーチ》である。

「ガムサッカーズ」とは「ガム（ユーカリ）の葉の汁を吸う人」つまりオーストラリア人を指す言葉であり、この作品はグレインジャーのアイデンティティの意識の現われでもあり、今回のイベントにふさわしい高揚感のみなざる幕切れとなった。

東京公演の2日後の11月29日（火）、仙台市内の常盤木学園シュトラウスホールにて、映画『高貴なる野人』の上映とP・スウェイツのリサイタルを行ない、開催地の高校生のみならず、地元の音楽ファンが集まった（実行委員会主催、東北文化学園大学共催）。音楽祭は東日本大震災の被災地でも開催されたしというオーストラリア政府（豪日交流基金）の意向を受けて会場探しに奔走した結果の開催であったが、東北文化学園大学総合政策学部の志賀野桂一学部長と飯笹佐代子准教授の協力がなければこれは実現しなかった。

さらに12月1日（木）には京都府京都文化博物館別館ホールにて、仙台公演と同様、映画上映とスウェイツのリサイタルが実現した（実行委員会主催、京都日本オーストラリア協会共催）。かつて日本銀行京都支店であったという響きのよいホールで、スウェイツの演奏と解説はますます冴え、日本音楽学会会員を含め、関西各地から集まった熱心なファンを魅了した。開催とゲストのケアについては京都日本オーストラリア協会の村上さつき代表に大きなお力添えをいただいた。

無事に3公演を終了したが、運営上の計画性や関係者の役割分担の仕方、学生ボランティアの配置方法など、反省点は多々ある。さらに宣伝・告知がもっと十分に展開できれば、本会会員を含め、いっそう多くの聴衆にグレインジャーを知らしめることができたであろう。ともあれ、そのオーストラリア人としてのアイデンティティを意識しつつ、破天荒な発想を展開し、ワールド・ミュージック、実験音楽、電子音楽の先駆者となった異才グレインジャーの存在を没後50年に（しかも災害の年にもめげず）この日本において顧みることができたことは、今後の研究や実演につながるものとして無意味ではなかったであろう。お世話になった関係者・関係団体各位に改めて感謝したい。

（東日本支部、青山学院大学、グレインジャー没後50年記念イベント実行委員長）

【傍聴記】

没後 50 年記念 グレインジャー音楽祭 2011 国際シンポジウムとコンサート・傍聴記

2011 年 11 月 27 日・青山学院大学青山キャンパス

広瀬 大介 (国立音楽大学)

作曲家の没後 50 年という区切りは、演奏家にとっては歓迎すべき区切りの年である。戦時加算などの問題はあるにせよ、基本的にはその作曲家の作品を自由に演奏できるきっかけとなるのだから。その意味で、クラシックの世界では決して知名度が高いとは言えないであろうパーシー・グレインジャー(1882-1961)の大規模な「音楽祭」が、こうした形で開催されたことの意義は決して小さくない。実験的な作品を数多く遺した作曲家と言うだけに留まらない、ヴィルトゥオーゾ・ピアニスト、民謡収集家、あるいはその一風変わったパーソナリティなど、多面的な魅力を湛えたグレインジャーのひととなりを紹介する、という意味において、本音楽祭は大きな意義を果たした。この分野における国内外の第一人者を一同に、学術的にも、音楽的にも充実した一連の催しを主催・実施した青山学院大学総合文化政策学部の宮澤淳一氏と学生諸氏の払ったご苦勞に、まずは大きな敬意を表したい。

音楽祭の詳しい内容は以下の通り。

10:30~12:00 : ドキュメンタリー映画『高貴なる野人』上映 (字幕付きでの日本初公開) (1)

13:00~13:50 : ピアノ・ソロ (ペネロピ・スウェイツ) (2)

14:05~15:45 : 基調講演と国際シンポジウム (3)

「グレインジャーのオーストラリアン・スピリットとグローバル・マインド」

出演 : ペネロピ・スウェイツ (ピアニスト、グレインジャー研究者)

アストリッド・クラウトシュナイダー (メルボルン大学グレインジャー・ミュージアム)

チャロン・ラグズデイル (アーカンソー大学)

柿沼敏江 (京都市立芸術大学)

宮澤淳一 (青山学院大学・司会)

16:00~17:20 : ウインド・セッション《リンカーンシャーの花束》全曲分析と通し演奏ほか (4)

大澤健一指揮くにたちウィンズ&コーラス

17:30~18:40 : ピアノ・チームワークとフィナーレ (5)

伊賀あゆみ&山口雅敏デュオほか

筆者はこのうち、最後の「ピアノ・チームワークとフィナーレ」(5)以外を傍聴したので、以下、それらについて簡単に報告したい。

(1) ドキュメンタリー映画『高貴なる野人』上映 (字幕付きでの日本初公開)

制作はイギリスのセントラル・インディペンデント・テレビジョン(1986年)。監督バリー・ギャヴィン(1935～)によるドキュメンタリー映画に、宮澤氏の映像翻訳ラボに所属する学生たちによる字幕が付された映像は、本邦初公開とのこと。グレインジャーの生涯についてはごく大雑把に紹介されるのみで、むしろその特異な性格、そしてその反映たる音楽の特徴について、識者が雄弁に語る(その一人には若き日のサイモン・ラトルの姿も見られる)というスタイルを採っている。「伝統的な音階・拍子・和声から解放された『フリー・ミュージック(自在音楽)』の何たるかを知る上で、よい案内役となるであろう。

(2) ピアノ・ソロ (ペネロピ・スウェイツ)

イギリス・チェスター生まれでメルボルンに育ったピアニスト、ペネロピ・スウェイツによるレクチャー・コンサート。グレインジャー作品が10曲ほど演奏され、合間に本人の解説(英語・同時通訳なし)が差し挟まれた。シャンドス・レーベルですでに数多くのグレインジャー作品を録音していることもあり、そのソロを直接聞くことができたのは大きな収穫(決して本調子ではなかったようにも見受けられたが)。グレインジャー同様、スウェイツもイギリスとオーストラリア両方の文化を吸収して育ったこともあり、音楽が内包するダイナミズムの源泉がどこにあるのか、理屈抜きで把握できる部分があるのだろう。

(3) 基調講演と国際シンポジウム

「グレインジャーのオーストラリアン・スピリットとグローバル・マインド」

当初発表されていた発表者に加えて、チャロン・ラグズデイル氏(アーカンソー大学)が加わったせいか、本シンポジウムは各パネリストの発表だけに終始し(それも時間が押し気味)、パネリスト同士、あるいは会場を巻き込んだ形の討論へと発展しなかったのは残念。ラグズデイル氏は民謡収集家としてのグレインジャー像と、それをいかに編曲、あるいは自分の音楽語法に取り込んだかを、指揮者・編曲家としての顔も持つ彼独自の視点で解説。柿沼敏江氏(京都市立芸術大学)は、女性作曲家・民謡収集家であったナタリー・カーティス・バーリンとグレインジャーの関係を、平等主義的音楽(Democracy of music)というキーワードをもとに展開した。アストリッド・クラウトシュナイダー氏は、自身が勤めるメルボルン大学グレインジャー博物館の学芸員として、その沿革と特徴を紹介することにつとめた。

(4) ウィンド・セッション《リンカーンシャーの花束》全曲分析と通し演奏ほか
吹奏楽に携わったことのあるひとならば、必ず挑戦してみたいくなるグレインジャー

作品。だが、今回のウィンド・セッションを指揮する大澤健一氏は、その譜面を見るだけではわからないことが多く、実際の演奏にあたっては、自らも東京佼成ウィンドオーケストラの桂冠指揮者であったフレデリック・フェネル氏に学ぶところ大であったという。《リンカーンシャーの花束》演奏にあたっては、第3曲《ラフォード獵園の侵入者》冒頭のソロをフリューゲルホルンかコルネットで演奏するバージョンと、ソプラノ・サクソフォンで演奏するバージョンの二種類が存在することを紹介し、両方のバージョンを披露した。普通の演奏会ではなかなかできない、本音楽祭ならではの企画であろう。国立音楽大学の学生たちによるブラスバンド、合唱が好演。